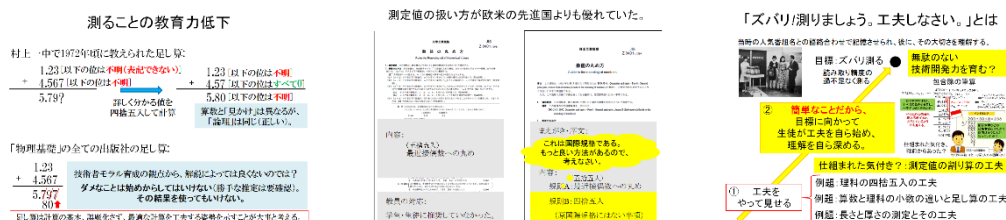


日本のものづくりの復興に向けて

考えの基となるデータが誤っていると正しい答えは得られません。データの取得能力が下がると、それを基にした考察が不明瞭なものになり、定量的考察の練習が出来なくなります。その練習不足が教育現場で起こっているため、定量的考察ではなく、ディベートに近いことが研究開発や製造の現場で行われ、新幹線の安全神話が崩れかける製造現場での悪気のない調整やデータ改ざんが起き、基幹産業の低迷が続いていると考えます。

実験や実習の未履修卒業が有力大学で大学紛争時代に起こりました。これにより、日本ならではの測定値の扱い方が次の世代に伝わらず、データ取得能力が下がり、それに伴い、考察力も下がり、産業停滞の人材的な下地ができ、日本の高度成長を支えてきた世代から大学紛争世代への世代交代が起き始めたころから産業の停滞が始まり、電子産業などの凋落が起こり、財政難から産業だけでなく科学も低迷していると考えます。

日本に高度成長が起きたのは官僚が優秀だったためとの考えがありますが、官僚が優秀になったのもデータ取得能力の高さとそれに伴う考察力の高さによるものと考えます。考察力が高いときはなぜその結果になったか分かった事柄も、データ取得能力の低下による考察力の低下によって、なぜその結果になったか分からなくなってしまいます。なぜその結果になったか分かっていたら、同様の事が次に起きたとき、「次も成功するよう」や「次は失敗しないよう」に準備が出来ますが、それが分からなければ、準備は出来ません。従って、データ取得能力の低下は長い間の経験に裏打ちされた判断力にも影響し、日本のものづくりがなかなか回復しない要因になっていると考えます。(目が悪くなったので、不透明な時代になったと認識しているが、不透明な時代へ変わってはいない。)



最近の実験書と戦後間もない頃の実験書をじっくり比較することで、日本のものづくりの復興へのヒントが得られると考え、研究を進めています。高等教育教養課程の物理学実験や中等教育の理科実験を通して、理系だけでなく文系の学生・生徒にも「ズバリ測る」ことを知ってもらうことで、ものづくりの復興ができ、「ズバリ！当てましょう。」のころの活気が戻ると今は考えています。